

「生涯活躍社会づくりシンポジウム」議事録

《基調講演》

(司会)

続きまして、基調講演に移ります。

本日のテーマである「シニアの力～生涯活躍社会の実現に向けて～」に関して、有限会社アリア代表取締役 松本すみ子様からご講演いただきます。

松本様のご経歴につきましては、誠に恐縮でございますが、お手元のプログラムへの掲載をもちまして、ご紹介に代えさせていただきます。

それでは松本様、よろしくお願いいたします。

(松本氏)

こんにちは。たくさんお越しいただきまして、ありがとうございます。先ほどの打合せの時に、ご自分の第二の人生を考えて、当事者として参加されている方がかなり多くいるのではと伺いました。

私も当事者ですが、私自身がなぜこのようなことを始めたかと言いますと、私も昭和 25 年生まれの 65 歳でございます。ほぼ団塊の世代です。この世代は、人口を見たら、ものすごく多いんです。この人たちが今までも日本にいろいろな影響を与えてきましたし、これから年齢を重ねても人口が多い故に、いろいろなところに影響を与えるに違いないと思います。そうであれば、自分自身も当事者として、どのように生きていくのが、今の日本・次の日本に良い影響を与えることができるのだろうかと考えまして、48 歳で前の仕事を辞めて、50 歳になる 2ヶ月前に会社を作りました。

私は、行政の方であろうとそれからサポートする方であろうと、当事者、つまり、自分ならどうかと考えると、何事も良い政策は生まれないのではないかと考えていますので、当事者目線というのを考えていただきながら、やっていければいいかなと思っています。

65 歳以上の方を高齢者と規定しますと、なんと日本の人口の 26% もいます。この 26% の人をなぜか行政も国も一緒にして考えることが多いです。でも皆さん、考えてみてください。20 代と 40 代の方は違いますよね。60 代の人と 80 代の方も違って当たり前です。でも、なぜかシニアということになると、みんなまとめて考えてしまう。この考え方をまず修正していかなければいけないと思います。

新聞を見ると、65 歳以上のシニアが認知症になる確率は 20% というように、一括りで出てきます。しかし、人口の 26% の人を一括りにしてよろしいでしょうか。私は違うと思います。

シニア世代のシニアの中の世代ということも考えてみたいと思います。

今の考え方では、50 代の方が、例えば 70 代になったとすると、60 代・70 代の枠みたいなものがあるって、みんな同じようになると考えがちです。でも、私は違うと思っています。今 40 代の方あるいは 50 代の方が、60 代・70 代・80 代になっていくときには、この方々独

自の時代的特徴・文化と経験でもって、そのまま年を取っていきます。したがって、50代の人たちが、60代・70代の人たちと同じになることは、ありえないというふうに考えます。

これはマーケットも勘違いしがちです。年を取ったらみんな同じ嗜好を持つと考えがちですが、これは絶対に違います。今の団塊の世代の人たちと80代の人たちとは、文化も道徳も経験も全く違います。したがって、60代と80代を一緒にした政策だとかアプローチをしますと、どっちかには、合わない。たいてい政策というのは、年を取った方に合わせますから、そうすると、60代の人たちは、俺たちのことではないよね、関係ないよというようなことで、うまくいかないということがあちこちで見えてきています。

年は、どんな人でも経験することができません。例えば、楽しいこと、辛いことは若くても経験される方は多くいますが、一回80代になって、60代に戻ってくることはできません。したがって、なかなか理解できない。

一緒にして考えるのではなく、この人たちの特徴は何なのか、この人たちはどういう時代を経て来て、どういう考えがあるんだろうかを、もっとセグメント化してみる必要があると思います。50代と60代もまた全然違います。そういう時代時代に合わせた政策ややり方をしていかなければいけないんだということをぜひ御理解いただきたいと思います。

一つの例として、要介護の例でお話します。私がお話ししていることですが、シニアも世代で異なるということです。65歳以上で要介護になる確率は18~20%だという数字があります。私はそれを見まして、60代の4人に1人、5人に1人も介護状態になっているのかなあと疑問に思います。そこで、年齢をもっと細分化して見ますと、全然違ってきます。65歳から74歳で要支援・要介護になっている方々は、4.8%しかいません。ところが、75歳以上になると30%以上になります。この2つの数字を足して2で割ると、18とか20になります。要するに、まとめて言ってしまうている。それでは、もしかすると75歳以上の方々にかかる労力をまだそれほど不要な60代の方々にかけてしまっているかもしれないということが、すごくあるのではないかと思います。

日本は高齢者が増えていて、世界でたったひとつの超高齢社会です。いろいろな政策や対応・アプローチだとか、行政のサービスだとか、行政に限らず、企業の製品・サービス、そういったものをもっときめ細やかに出さないと、シニアの人たちには対応できないのではないかと思います。皆さんが何かやられるときには、どのシニアか、また、男性か女性かでも違ってきますが、どのシニアにアプローチしていくのかということを考えて、そこに注力していく必要があります。太平洋にただ餌をまいてシニアという魚が食いついてくるだろうというのはもうあり得ないと考えます。

日本人は非常に元気でして、健康寿命は、男性70.42歳、女性73.62歳です。最近の統計ではまた少し上がったみたいですが、これも世界一です。そこで、平均寿命と健康寿命の差をどれだけ短くできるのかということが、当事者の人たちにも重要ですが、お世話する世代の方々にもとても重要になってきます。しかし、日本人は、世界的に見てもみんな元気です。65歳になるとやたら、高齢者だ、シニアだと言いますが、本人たちも、今まで

はそうは考えていなかったのに、シニアだ、高齢者だと言われて意気消沈する人がたくさんいます。自覚がなかったのに、よそからと言われて意外とがっかりくる人もいますので、その人たちを元気にさせていくことを考えていかないといけないと思います。

団塊世代が高齢者仲間入りをしたことで、新シニア世代の登場と言われていますが、今、この人たちはシニアのメインです。シニアマーケットは、シニア本人を対象にするか、あるいは介護福祉・介護用品に向かうかの二つです。介護用品はご本人が買うことはありません。子ども世代あるいはお世話する人たちが買います。だから、現在のシニアマーケットのターゲットはやはりこの新しいシニア世代の人たちなんです、とマーケットの方々には申し上げています。

そうしますと、あなた方はターゲットにした世代の人たちがどんなものを欲しがって、どんな状況にいるのかちゃんと理解されていますか。もしかして間違っ、て、おじいちゃん・おばあちゃんのイメージでものを作ったり、サービスを行っていませんか、ということをおし上げますと、確かにそうだねと。若い人は、どうしても65歳は、おじいちゃん・おばあちゃんだと思うらしいんです。

先日、テレビに出る機会があったのですが、最初いただいた台本に、「65歳のおじいちゃん・おばあちゃんが元気でやっています」と書いてあったので、私は、これはやめましようと言いました。おじいちゃん・おばあちゃんと言われて気持ちの良い人はどの年の人でもいません。おじいちゃん・おばあちゃんと言われて嬉しいのは、孫からだけです。他人から言われる筋合いはありません。若い人が台本を作るとそうになってしまう。当事者を理解しようと思わないと分かりません。当事者意識を持つとか、そういう情報を知るのが、とても重要だと思います。

マーケットは、この人たちをメインターゲットにしていますが、次に狙っているのは、50代の人たちです。新シニア世代の人たちはまもなく70歳になってしまうので。今、予備軍とおっしゃっていましたが、まもなくシニアになる方々に向けて、いろいろなものを提供しようと始まっています。行政もそういった人たちに向けた取組みを早く始めないといけません。当事者の皆さんも50代だからまだ早いよと思っていますが、早くありません。第二の人生を50歳くらいで準備されるのが、良いのではないかと思います。

新シニア世代にサービスを行うのであれば、この人たちがどんな人たちであるかということをやはり分かって、その人たちを理解したものを提供しなければいけません。

この資料は、伊藤忠ファッションシステムさんからの出典です。先ほど申し上げたように、50代、60代、70代では経験も文化も違います。70代の方々のことは、「キネマ世代（これまでシニア）」と呼んでいます。私たちが高齢者と思ってきた人たちは、どちらかというところの世代です。男尊女卑で、私もすごく実感することがあります。

そして、今どきシニアというのが、ちょうど団塊の世代です。シニアになり立ての方のことです。戦後第一世代で、男女平等教育を受けています。

私はNPOもやっています、団塊世代のメンバーも、キネマ世代の70代半ばくらいのメ

ンバーもいるのですが、やはり考え方がものすごく違いますね。特に女性は、夕方になると「帰らなくちゃいけない」と言います。なんでと聞きますと、「主人のご飯を作らなければいけない」と言います。それならば、「作っておいて食べてもらえば良いじゃないの」と聞くと、「ダメなんです。うちの主人は私が出さないと食べないんです」ということを言います。ご主人も奥さんも、それが当たり前だと思って生きてきた世代です。こういう人がまだたくさんいるんですね。

団塊の世代、私とほぼ同じ世代になりますと、「いいの、いいの、ご飯作って置いてきたから、ひとりで食べてるでしょ」、「出かけてるから、ひとりで食べてるでしょ」となる。もっとあとの「この先シニア（ハナコ世代）」になったら、また全然違ってくると思います。この人たちがそれぞれに年取っていくわけです。ハナコ世代がキネマ世代の考え方に絶対ならないわけです。だから、時代ごとに対応を考えていかなければいけないということです。

日本は世界一の超高齢社会ですから、日本でいろんなことがうまくいきますと、世界に持って行けます。日本の行政が地域社会の中で、高齢者に活躍してもらえる社会にすれば、世界のモデルケースになると思います。私のところに韓国や中国、英国 BBC 放送などから日本のシニアはどのように暮らしているのかを知りたいので、取材させてくださいという申込みがあります。実は世界中から日本のシニアは、非常に注目を浴びていまして、特に近隣、アジアの国も今後は高齢化が始まりますから。インドネシアやフィリピン、韓国はもちろん、シンガポール、タイ、中国などがまもなく高齢社会に入ります。若いのは、インドとミャンマーくらいです。日本がどのような政策をやり、当事者のシニアたちがどのように長寿の時代を生き抜くのか、それを世界中の人たちが注目していると思います。

長生きしたときの平均寿命と健康寿命の差がいろいろと問題になるのですが、医療費というのを何とかしないとイケません。だから、たくさんいる団塊世代の人たちには元気で、どこでもいいので就労したり地域社会で活躍してもらったりして、元気でいてもらわないと、これからの日本は怪しくなってくると思います。

2013 年度には、医療費が 40 兆円超えました。40 兆円がどのような金額なのかと申し上げますと、日本の国家予算が 98 兆円ですので、その半分近くを占めるような金額です。我々シニア当事者としては、これはいかんかと、後の世代の人たちに迷惑をおかけするんじゃないかと、病気になっていられないと思いますよね。今までは、日本はやたらと医療費を高齢者にかけてきましたが、これからは違うんじゃないかなと思います。どれだけ元気でいられるのかということに、当事者も目を向けていかないと大変な世の中になってしまうと思います。

しかも病気って面白くないですよ。寝てて何が面白いですかね。やはり、元気でおいしいものを食べて友達と遊んで、旅行に行って、買い物して、そういうシニアの第二の人生の方が良いわけです。この何兆円かをそちらのほうに回せば、日本ももっと活性化するだろうと考えます。医療に携わっている人には申し訳ないですが、医療費は抑制していか

ないといけません。それは、国がどういう政策をしてどうのこうのということだけでなく、一人一人が自分は第二の人生をどのように生きれば、子ども・孫にお世話をそれほどかかれないで、彼らがちゃんと生きていくために貢献できるかということを考えるのが重要でしょう。

日本の標準世帯はすでに「おひとりさま」です。今までは、日本の標準世帯というと、夫婦に子どもの世帯でしたが、それは全世帯の 28%です。ところが、単身世帯、これは若い人を含めてですが、全世帯の 32%を占めます。もちろん、高齢者は配偶者に先立たれたりしますので、65 歳以上の高齢者の単身世帯は増えていきます。

標準がいつまでも、いつの時代も変わらないかという、そうではありません。世の中、世界は動いていますよね。それと同じように日本もどんどん変化しておりますので、こういうことも考えて政策を作っていかなければいけません。

今の団塊の世代は時間をたくさん持っています、時間持ちです。団塊の世代あたりの人たちまでは、小金持ちでもあります。お金を結構持っています。2011 年にはシニアの消費が 100 兆円を超えたという数字が出ましたが、今や 120 兆円です。日本の個人消費の 45%を占めています。

一方、インバウンド、外国人の消費は 2 兆円～3 兆円と言われておりますから、実はマーケットはシニアにもっとターゲットを当てて、いろんな対策をした方がもっと儲かるのではないかと思います。なかなか難しいようです。

さて、今のシニアは元気だから何かをしたい。ところが、問題は、何をして良いのか分からないということです。お金も別に使いどころがそんなにない。趣味もないし、仕事一筋だったし、ということで力を持て余しているというのが、日本の現状なのではないかと思っています。この人たちをどこかで生かせる方法がないものかと、すごく考えたりしています。ただ、仕事一筋できた人が多いので、難しい面もあります。

長寿社会ですから、完璧に人生二毛作時代に入ってきます。昔は定年退職して程なく、10 年くらいでお亡くなりになられていましたから、そんなに無理して、地域社会の中で何かしようということもなかったのですが、今は平均で 20 年くらいあります。そうしますと、その 20 年、まだまだ元気ですから、もう一度、第二の経済圏といいますか、活躍圏を地域社会中心に作ったらいいのではないかと思います。

生涯現役社会といいますと、日本はサラリーマンが多いので、働くとはどこかに雇われてサラリーマンになり、毎月給料をもらうことだと思っています。政策も高齢者雇用安定法で、65 歳まで働いてもらいましょうとか、それでは 70 歳までにしましょうとか、どうしても企業に負担をかける政策が先になる。高齢者を雇ってあげてくださいよという感じになってしまいます。

会社はそんなにたくさんの人を雇える余力はありませんよね。どうやって 65 歳まで働いてもらっているのかというと、若い人の給料を少なくして、高齢者に回しているわけです。これは、やはり違うのではないかと私は感じています。定年退職したら、定年後にもう一

回違う人生があって、そこで自分の力を発揮して、こちらで培った力を発揮しても良いですし、また、別のことをやっても良いですし、そういった違う第二の人生ができるような日本の社会にしていく必要があるのではないかと考えています。

それはどういうことかという、団塊の世代くらいまでは年金をとりあえずもらえますから、年金をもらいながら地域社会のなかで、行政ではやりきれないことを、自分たちの小さな事業にしてやる「いきがい起業」です。起業というとどこかのビルにオフィスを借りて人を雇って、会社を作ってというような起業しか思い浮かばないことが多いですが、実はそればかりではなくて、地域社会の中で足りないこと、例えば子育てとか、高齢者のこととか、事業のネタは転がっています。そういうことを行政と一緒に市民が事業のような形にしてやる。そこに経験ある高齢者の人たちが入ってくる。入ってくる人たちは、9時〜5時で必死になって働くのではなく、自分のやりたいことを自分なりに選んで、年金以外に小遣いが入ってくるような社会を作り上げる。それが非常に重要ではないかと考えています。

生涯現役社会という、もう一回会社で働きましょうというような発想しかないというのは、非常に寂しい気がしています。第二の人生や定年退職後は、もう一度違う社会が待っているんだよということになれば、定年なんて怖くないです。今は、辞めたらどうしよう、何をしたら良いのかな、年金だけでは生きていけないから、どうしたらいいのかなと、そんな感じではないですか。

年金をもらいながら、第二の人生でお小遣い程度に稼ぎ、それで生きていける社会を作り上げていけたらいいなと思います。これは、理想でしょうか。

どうしても、どんなにお金があっても皆さん、お金は不安なんですよね。いつまで働きたいと思いますか、活動したいと思いますかという統計グラフがありますが、「働けるうちはいつまでも」という部分を見てください。これを見ると、年を取れば取るほどパーセンテージが増えています。日本人は働けるうちはいつまでも、活動できるうちはいつまでも活動したいと考える人が多いのです。そこで、この力を第二の人生の二毛作のところで生かせるような考え方と社会を作っていけると良いなと思います。

日本人は働くことが大好きで、だから戦後の荒廃からここまで日本は成長したのだと思います。趣味がない、働くこと一本できましたと言っても、実は働くことの中に、自分なりの価値観で、自分なりのアイデンティティを作り上げてきた。だから、大変なこともあったけど、満足して働いてきたのだと思います。そのDNAがあるから、自分は働けるうちは、何かできるうちは、何かしたいという思いを持っているのが日本人だと思います。この人たちを生かしていく政策をぜひやっていただきたいと考えています。

雇われない生き方というのたくさんあります。実は第二の人生の方が面白い。厚生年金に入ると年金が減らされるので、みんな文句を言っているわけですが、会社に雇われて、給料もらっているのだから当たり前じゃないのと私は思います。それが嫌なら、個人事業主のような形で契約してやったらいかがと言ったりしますが、そこまでは、といったよう

な言葉も返ってきます。

第二の人生の活躍の場は地域社会の中であって、地域の中でまじめにやっていけばそれなりにやっていけますので、このようなことをぜひ考えていただきたいと思います。

企業にだけ人を雇え、人を雇えと言っても無理でしょう。それを無理矢理押し込んだ結果が、若い人の給料を減らしているのでは何の意味もありません。つまり我々は、シニアとして自立していきましょうよ。自分の力を生かして、次の第二の人生の20年で社会に貢献したり、あるいは自分の好きなことをやったり、やり残したことをやったりして、社会にもう一度貢献していくことを考えていってもらいたいです。

もちろんまだ子どもに学費が必要だとか、事情を抱えた人はどうしてもお金を稼がないといけなかったりするのですが、そういう人はそれなりに働けば良いと思います。しかし、そのような事情もなく、自分の資産を計算してみたら、そんなに必死になって働くこともないなと思ったら、半分くらいは社会貢献みたいな仕事をしながらお小遣いを稼ぎながら、そういう第二の人生のあり方もあっていいのではないかと考えています。

今はシニア世代の8世帯に1世帯は共稼ぎとありますが、これはフルタイムで働いているわけではありません。パートとか、それこそファストフードに行くと、いらっしやいませと言っている元気な70代の方もいたりしますが、そういう人たちは生き生きと働いています。そういう人たちは働くのが面白くて仕方がないのです。「こんな年で働けるとは思いませんでした」とか、「毎日が楽しくて」と言って楽しんでます。そういうものを見つけていけば、病気になりませんよね。そのようなことができていければ良いなと思います。

戦後、日本が基盤として求めてきたのは「衣食住」だったかもしれませんが、今や世界第3位の経済大国で豊かなものを経験してきた日本人は、「医職住楽」です。医は健康、職は仕事や活動、それから住は、家もありますが、地域です。地域社会は震災後に非常に重要になりましたよね。それまでは、サラリーマンでも家と会社の間を行き来すれば、あとは奥さんがやってくれて事足りていました。しかし、あのような震災が起こると、それではだめなんだということを皆さんもよく分かったと思います。地域社会、コミュニティの中で皆さん協力し合わなければ、とてもじゃないですが生きていけないんだということで、会社だけではなく、地域社会の一員として、いろんなものを自分の中にも取り入れていかなければいけません。

それから、人生は楽しくなければ何の意味もありません。社会貢献活動は人のためですが、基本は自分自身のためです。定年後、生涯現役で地域社会の中で楽しいことをそこそこやって、あとは奥さんや子どもと楽しんだり、友人と楽しんだりする人生、そういうものを見つけていく。そういうようなことを目指していくことが必要なのではと思います。なかなか難しいですが。

居場所は地域社会です。今は会社人生を享受されていると思いますが、定年後の再雇用はそんなに面白いものではないようです。私の友人も再雇用されましたが、1年で辞めました。なんで辞めたのと聞くと、「結局、窓際でしかない」と、「何か手伝おうか」と言っ

でも「結構です」と言われるし、陰で「あの人たちの給料分を俺たちが支払っているんだよね」と言われるんだよねということで、嫌になって辞めましたと。それで今は、これまで広報みたいな仕事をやっていたので、それを生かして、シニアライターになるんだと言って頑張っています。今の仕事を一生懸命やっていただくのはもちろんいいと思います。しかし、絶対次の人生が必要になってきますから、50代の人にはそれを考えながら、準備しながら、生きていていただきたいと思います。

シニアの力が期待される時代です。ダイバーシティという言葉もありますけど、一億総活躍とイコールですよ。誰もが、その持っている力を、女性であろうと、シニアであろうと、外国人であろうと、障害者であろうと、それぞれにできることがあるはずだから、それでもって社会に貢献していきましょうというような考え方ですが、これでいかないと日本は成り立ちません。ですので、国も行政も一億総活躍社会、今の政府の説明はあまりよく分からない部分もありますが、基本的な考え方は当然だと思います。

すでに、そういうことを実践しているシニアたちがたくさん出てきてまいりました。みなさんの周りにもたくさんいると思うのですが、そういう人たちをご紹介しますと、あの人は特別だから、俺たちとは違うんだよと言う人が必ずいらっしゃいます。しかし、それは言い訳です。このガイドブックに載っている人たちもこれから私が紹介しようと思った人たちも、決してすごい能力を持って、そういうことをやり始めたわけではありません。たった一つ言えることは、あれが好きだ、あれをやりたい、こうしたい、あれをやり残したい、という思いを一つずつ積み重ねて、第二の人生で生かしたという方が多いということです。それを行政や企業などが応援して、そのシニアの方々が活躍できるような社会をぜひ作っていただきたいと思っています。

私の話はこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。

(司会)

松本様、ありがとうございました。皆様、今一度、松本様に盛大な拍手をお願いいたします。